

翻訳

ヘレーネ・シュテッカー著

男性－運動 (1897)

掛川 典子

解題

本稿は、ヘレーネ・シュテッカー著『愛と女性』(Stöcker, Helene 1906, *Die Liebe und die Frauen*. J.C.C.Brun's Verlag, Minden in Westf.) に所収の第5論文「男性－運動」(Die Männer-Bewegung. Stöcker 1906: 38-47) の全訳である。初出は1897年であり、『批判』(*Kritik*) に掲載された。

表題は、著書の最終頁に掲載されている目次においては「男性運動」(Die Männerbewegung) と表示されている。初出の1897年と出版年の1906年の間の用語のこのような不統一自体が、「男性運動」という範疇がまだ一般化されていない時代におけるシュテッカーの先見性をうかがわせる。当時は新しいタイプの男性の出現や男性の意識の変化は見え始めているが、「運動」としては確立されていなかったであろう。

訳出にあたり、Frauは「女性」とし、Weibは「女」と訳し分けた。Mannについては文脈により「男性」と「男」を使い分けた。Mütterlichkeitは「精神的母性」と訳されることが多いがここでは単に「母性性」とし、Mutterschaftは「身体的母性」とも訳されることが多いがここでは単に「母性」とした。ここでのシュテッカーの両用語の使い分けはまだ厳密でないように思われる。Mitarbeitはあえて「協力」よりも「協働」と訳した。訳者が注意したい単語及び人名には原綴りを()内に付し、生没年も記した。原文の中で著者が強調している単語については、訳文中では太字で表記した。著者が“ ”を用いている語については「 」を使用した。この論文には原注はもともと付いていない。

この「男性－運動」という論文において、シュテッカーは教育による男性の意識改革が女性問題の「核」であるという思考を明瞭に表明している。まさに現代に通じる見解である。女性運動や女性問題は決して女性だけの問題ではなく、同時に男性の問題であり、社会の問題である。そのことが百年前に既に言明されている。当時、ドイツの大学は1895年から女性の聴講に対して門戸を開き、講義やゼミナールへの女性の参加の許可を個別に担当教授に委ねた。バーデン州は1900年に大学への女性の正式な学籍登録を認め、その後各大学が続いた。プロイセンでは1909年8月から開始された。シュテッカーは『回顧録』(*Lebenserinnerungen*)によれば1896年秋にベルリン大学で聴講とゼミナール参加を開始した。数百年間男性の牙城であった大学に女性が入学を始めたとき、男性の態度も明

瞭に2分されたのであり、女子学生を受け入れ、女性の未来を見据えて支援する男性教授と、専門的指導上受け入れることが相応しいにもかかわらず決然と拒否する教授陣をシュテッカーも体験していた。また1896年9月19日から26日までベルリンで「第一回国際女性会議」が開催され、14か国から17,000人の参加者が集まり、シュテッカーも参加した。

シュテッカーは「男性-運動」で、同時代の進歩的で有能な女性たちに「今日の男性」の女性観は時代遅れであると語らせることから始めている。進歩的な女性たちとは間違いなく、自立を目指し、男女平等の政治参加や高等教育参加を志す女性たちであった。そして「明日の男性」あるいは「未来の男性」への期待が述べられる。同時代の男性たちが女性に対しては、考え方も感じ方も古い、という認識は現代の私たちが口にする。しかしまた既に新しい女性観を持った男性が出現している、という認識を持っていることも、現代の私たちの状況と極似している。ここで「黒人領主」の女性観を時代遅れの例に用いている点は、現代から見れば差別主義的である19世紀末の西洋中心主義の文化観が、当時の民主的な進歩的知識人の多くと同様に、進歩的とみなされる女性知識人にも共有されていた時代的制約と言えらる。

現代のジェンダー論は、スコット (Scott 1988) のポスト・モダンのジェンダー分析に見られるように、ジェンダーを性の差異化によって生み出される権力構造の問題として分析するに至っている。1世紀前のシュテッカーのこの論文も、それまで「神聖な」自然的所与と見なされていた男性の「自然法的優位」が危機に瀕している、という認識に基づく「男性-運動」の新しい兆候を論じている。シュテッカーも性差問題を権力問題として捉えていた。しかしシュテッカーの立脚点は勿論異なる。女性論でもあり男性論でもあるジェンダー論に関してのシュテッカーの独自性は、ニーチェ (Nietzsche, Friedrich Wilhelm 1844-1900) の哲学によって変革された時代意識に依拠して、少数派の新しい男性の意識を視野に入れていた点にある。ニーチェによる価値転換理論と「より高い人間」(höherer Mensch) の創造という目標が、シュテッカーの他の論文同様にここでも掲げられている。

教育を通しての意識改革を求めるシュテッカーの主張の眼目は、男性も新しい視点から「より良く教育」されねばならず、それが「女性問題」の「核」であると捉えていることである。人類が「より高い人間」を創造するために、男女の「協働」(Mitarbeit)が必要であり、自立のための女性の教育の変革と同様に、「より高い人間」を目指す男性の教育の変革が重要である。そのことを男性も気づいているとする。そうでないと最良の有能な女性たちが男性に絶望し、男性を軽蔑するようになる、という恐れを男性運動の指導者たちも認識しているのである。男性の「自尊心」や「繊細感覚」を育てる人格教育が要請される。次世代を育てる課題を男女両性が認識し、親となる自らの人格も人間的に、倫理的に優れたものに高めていくという目標である。

ところで「繊細感覚」という概念からは、むしろジンメル (Simmel, Georg 1858-1918) の性差論との関連が連想される。シュテッカーはベルリンでジンメルの講義にも参加して

いた。ジンメルは女子学生も受け入れ、女性運動に理解を示し、その種のエッセイを多数発表した。ジンメルは1902年『新ドイツ展望』(*Neue Deutsche Rundschau*) に発表した「女性的文化」(Weibliche Kultur) において「繊細化の過程」(Verfeinerungsprozeß) に言及している。この概念は1911年以降の「女性的文化」では全面的に削除された(掛川1996)。1902年論文ではジンメルは、女性の地位が男女平等の段階に向かう途上での、性差の近接に伴うエロティックな魅力の喪失の回避策として、性差感覚の「繊細化」を提案した。他方1896年論文のシュテッカーは「繊細感覚」を男性における女性の人間性の尊重というニュアンスで用いている。両者の概念内容は異なるが、性差をめぐる「繊細感覚」が議論に上がる時代風潮が見て取れる。当時ベルリンでは同性愛も含む性差問題が人権問題として意識される初期段階に移行していた。

シュテッカーの用いている「より高い人間」は明らかにニーチェの概念であり、シュテッカーの初期の女性解放論は、理論的にはニーチェ哲学を女性の経験から応用したものである。しかしシュテッカーは、ニーチェを越えて女性論に労働の視点を取り入れた。既にシュテッカーは19歳でベーベル(Bebel, August 1840–1913)の社会主義的女性論『女性と社会主義』(*Die Frau und der Sozialismus*) を読んでいた。彼女は女性も男性も共に労働することを前提に立論した。「母性保護同盟」(Bund für Mutterschutz) を通して生涯を女性運動と社会運動および平和運動に捧げたシュテッカーが、当初から男性と女性の共闘を掲げていたことは特筆に値する。

ここでもう少しこの論文の内容に立ち入るならば、「未来的な男性運動」は経済問題が前景にあるとし、女性の経済的自立を前提にしている。男性運動の「指導者」は女性の立場の側に立ち、女性に関して男性と同等の業績に同等の賃金を要求することを挙げている。更に両性の自由な新しい、喜びに満ちた交際を可能にするために、女性の教育の根本的改革を要請する。女性が男性の「高い精神的な喜びの共闘者で享受を分かち合う者」となるために、女子教育を経済的な自立のための教育に変える。「未来の男性」は市民法の変革も志す。男性の権力と支配の専有を変革し、男性によってのみ作られた法律を変えて、家族の在り方も変える。そして性別分離の淵を越えようとする。

新しい女性の教育によって、女性は男性の高い理念を理解するようになる。男女共に「民族と人類の目標」のために尽力する。しかしここで、女性について機械的に全く男女平等にするというのではなく、女性の「母性」に女性自身が正当な評価をするよう学ぶべきとしている。「結婚と母性」(シュテッカーは文中では「母性性」を用いている。「母性性」の概念に実母でなくとも育児にあたることを含めた可能性もあるが、この論文中ではまだ「母性」と「母性性」の区別は明瞭ではない)を諦め「禁欲」に向かう同時代の知的女性たちの趨勢とは異なる方向に、新しい女性の生き方を見出そうとする主張である。それまで女性が締め出されていた「高い文化」に女性も参与し、大学での教育を女性が受講し、学問的研究に従事し始めた時代の、まさに最前線に立ち、しかも恋愛の喜びも「母性」も否定せずに人生を切り開こうとする女性を求めている。シュテッカーは、自立し勞

働する対等な男女が人類の未来のための高い目標を共有して努力する姿を理想として生きた。

高等教育を受けて人間として可能な限り発達し、職業に就き、経済的に自立し、なおかつ高い理念を共有するパートナーと恋愛して共同生活をする。この理想をシュテッカーは追及した。1897年夏学期にシュテッカーはアレクサンダー・ティレ (Tille, Alexander 1866-1912) と出会い、大恋愛に陥る。ティレはダーウィン (Darwin, Charles Robert 1809-82) とニーチェを信奉するグラスゴー大学講師であった。しかしティレとは、労働者問題の無視と女性観の相違、何よりもキリスト教信仰の問題で相容れなかった。シュテッカーはドグマ的教会は拒否したが、イエスの「山上の垂訓」への信仰は捨てず、この理念の不一致のために自らティレとの別離を決める。進歩的な思想を持ち、最高の教養があり、話題豊富で、異性として魅力に溢れた男性と、恋愛に陥っても、生き方が理解し合えなければ共同生活者としては選ばないという決意である。二人は最終的には5年間の確執のち完全に別々の道を歩むことになった。1896年の「男性-運動」は、シュテッカーの明瞭なパートナー観も示していて興味深い。

【参考文献】

- 掛川典子 1996 「日本における女性文化論の基礎 (その1): ジンメル的女性文化論」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第18号 (7-11).
- 掛川典子 2009 「ヘレーネ・シュテッカーの学問就業時代 (1892-1901)」『学苑』850号 (1-23).
- Scott, Joan Wallach 1988, *Gender and the Poitics of History*. Columbia University Press. 〈邦訳〉ジェーン W. スコット 『ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳 1992 平凡社.
- Simmel, Georg 1902, *Weibliche Kultur*. In: *Neue Deutsche Rundschau*.
- Stöcker, Helene 1906, *Die Liebe und die Frauen*. J.C.C.Brun's Verlag, Minden in Westf.
- Stöcker, Helene 1915, *Lebenserinnerungen - Die unvollendete Autobiographie einer frauenbewegten Pazifistin*. 2015 Hrsg. Reinhold Lütgemeier - Davin und Kerstin Wolff L'HOMME Archiv 5. Böhlau Verlag.

訳 文

私たちが今日、私たちの中で最も有能で最高に発達した女性たちに男性に対する自分たちの地位について問うならば、確かに肩をすくめられて次のような答えを得るだろう。「今日の男性 (Mann von heute)? 男性はまさに非常に役立つ事物を企て、電車を作り、商

業契約を結べる——総じて最高に進歩した人間——かも知れないが、女性に関しては——神よ憐れみください！男性は自分の思考と感覚において非常に時代遅れであるので、数百年の黒い美女たちを自分のものと呼ぶあらゆる黒人領主と安んじて無言で意思疎通できるだろう。女性に関しては、彼らの文化程度はかなり等しい。私たちはまさに明日の男性 (Mann von morgen) を待たねばならない」。

この深いペシミズムに対して、この未来の男性 (Mann der Zukunft) は既にそこそこに現れている、と確信できることが私は嬉しい。——男性たちが騒然としていることは、私たちの精神生活の注意深い観察者にとって長年疑いもない。男性が少なくとも同様に密接に関わる事物を女性だけが気に掛けることに、その即座の達成が男性にとっても最高の意義があるような目標に女性が努力することに、男性たちは辟易している。まさに男性に最高の利点をもたらすであろう制度と状況が、後になってこの善美の事物を寛大にも男性の膝に投げ出すであろう、より弱い性によってのみ戦い取られねばならない、ということを彼らは前代未聞だと見なす。それは彼女たちの男性的な名誉に反する、と男性たちは長く感じ取っている。男性たちの中の精神的エリートが動き出して次のような関係 (Verbindung) を結ぼうと考えていることを、私たちは喜びと満足をもって見る。即ちその関係は、戦いの中で女性たちと並び立とうと試みるが、女性自身の幸せと悲しみがここで問題であるとの認識を、特に男性たちに呼び覚ますことを試みようとする。

勿論なお全ては生成途上にあるとしても、それでも今日既に未来的な「男性運動」のプログラムの中からいくつかは現れている。

前景にあるのは、19世紀末に洞察に満ちた人間にとってはおのずと理解されるように、経済的問題である。

男性運動の指導者たちは、女性たちが従来のように男性たちより低い値を付けられ、そのように男性たちと汚れた競争をすることに、もはや耐えたくない——従って彼らは全エネルギーをもって同等の業績の際に同等の賃金を支持する。男性は目下全ての地上的な権力と支配の専有をまだ相当しているので、この事柄において一致し断固とした行動が成果を挙げられるであろうことを彼らは期待する。

男性が自分の最も美しく最も生命力の強い年齢を売春婦たちの社会あるいは疑わしい関係の中で送っているところで、今起こっているように、彼らは青春時代の最善で最高の喜びをこれ以上は騙し取られたくはない。それ故彼らは特に、社会的な諸関係の改変に、また教養ある地位のためにもかなり早く婚姻できるように努め、そして更に**社交的**交際の改変にも努める。社交的交際は今は両性を非常に滑稽なほど窮屈で、前代未聞の仕方では分離させているので、全階級の女性たちは自分の生涯をほとんど女性のもとでのみ生活しており、他方で男性は恐らくは生涯のかなりの時間をきちんとした女性たちと過ごすよりもいかがわしい女性と過ごしている。しかし両性のかなり自由で高貴で楽しい交際を可能にするために、——それが一部ではアメリカやイギリスで既に存在しているように——そのような交際は当然いつも「精神的な」関心を覚悟する男性には十分な刺激と魅力を与える

が、特に女性の教育の根本的な変革が必要である。

男性たちは、女性のための徹底的で近代的な教育をそれ故熱心に要求する。そのような教育は、男性の高い関心を分かち、近代的な生活の複雑な諸関係の中で彼にとって単に無理解で妨げる伴侶ではなくて、彼の全ての高い精神的な喜びの共闘者であり享受を分かち合う者に女性をする。女性が彼女たちに偶然に結婚を申し込む男性を——彼の前歴が望むようなものであるとしても——扶養されるためにのみ、なお長く受け入れることは、女性の自尊心に反する。それ故彼らは、あらゆる若く健康な人間を——男でも女でも——職業に携わるよう教育することを、その者を稼げるようにすることを要求する。というのは、もし女性も男性抜きで男性と並んで経済的に自立するならば初めて、最良で最も有能な女性を所有することが、男性にとって名誉と勲章になるだろうから。男性が個人的な長所のために受け入れられるということに、男性は今日確信を持たない——それが今や彼に意識されているかどうかにかかわらず。そしてもし女性が——自身が養われるかわりに——自立的に稼ぐことができるならば、そこでは一面ではかの反道徳的で経済的な依存が、他面ではそんなにも多くの不幸な結婚の原因である、かの粗野にする専有が生じないのだが、その場合勿論それは婚姻締結の容易化のために有意義に寄与する。互いに経済的に自立している二人の人間は、持続して理想的な関係を相互に正しく保つことを、現在の諸状況のもとで可能であるよりもずっと容易にするのである。

未来の男性たちは当然法律的領域の一連の改革にも努力する——特に市民法の一連の条項の変革に。あらゆる繊細に感じる高貴な男性を赤面させねばならない事物に対して、燃え上がる抗議をしたのはほとんど女性のみだった、ということが男性たちには既に長らく恥辱であった。私たちはここで「父親は自分の婚姻外の子もたちと親族関係にない」という命題を思い出すだけである。誰が全ての自然で名誉な感情へのこの侮蔑を考え出したのか？そのような、男性によってのみ作られた法律に際して——国家的に保護されている悪徳のことはここでは全く述べないが——男性の永遠の自然法的優位について語る勇気を、まだどこから男性たちは取ってくるべきなのか——その優位を彼らはそれでも、彼らが愛している女性に対しては少なくとも——維持したいと望んでいるが。従来地上にあった最高で最も神聖なもの、即ち男性の優位が——最も進歩した女性も、もし可能ならばその優位を信じたいだろうが——最高の危機にあることを彼らは次第に理解する。男性たちが即座に立ち上がらないならば、苦いあざけりと嘲笑の種になるだろう！——

今や女性たちが真剣な学問的研究を始めるときには特にである。もし彼女たちが全ての民族や時代の発生史と風俗史を概観するならば、——もし彼女たちが医学的研究をなし、人類における男性の性衝動の無際限な活動が引き起こす荒廃への嫌悪の念を発見するならば、もし彼女たちが国家と法律の複雑なシステムの中をより深く覗くならば——もし彼女たちが全ての時代の文献を——女性のためだけに選ばれたのではない文献を——知るようになるならば——その場合彼女たちは最初に戦慄を覚えるであろう。彼女たちは、存在しなかった世界に自分たちはそれまで生きていたのだということに気づくだろう——そし

て、何故男性は、彼女たちを現実に全く耐えられないように教育するほどに残酷であるのか、と無益にも自問するだろう。しかし、女性たちの愚かなロマン主義と高く飛翔する理想主義を、何故男性がいつも皮肉ってきたのかを彼女たちは理解するだろう。同じものの全ては、勿論男性からは、人生に触れることを通して既に最初の学期にまさに徹底的に追放される！

男性の「神に望まれた」優位が道徳的關係においては未だ全く存在しないことを、彼女たちは痛ましくも体験するだろう——それはこれから最初に獲得されねばならないということ。男性が女に行使しなかった暴行、強姦、残酷な犯罪はなかった、ということ。彼女たちは見るだろう——知りつつあり努力している女性の前でなお長く男性として、畏敬を要求できる何者かとして、男性が存在していたいならば、男性もまた初めて人間に、従来よりもより高い人間 (höherer Mensch als bisher) にならねばならないということ。

人間的な共同生活の「今とかつて」を前にして耐えがたい惨状を彼女は理解するだろう——そして彼女は「来るべきもの予見者で告知者になる」のでなければ、それに耐えられないだろう。しかし来るべきものを招くことは——彼女の力だけでは十分でない。男と女が一緒に初めてそれに到達できる。というのは、人生の最高で最良のものは、全てを相互に分ち合うことのできる二人の人間の共同生活においてのみ開花するのだから。即ち、高さと深さ、精神的で感覚的な歓喜、労働と享受の全てを分かち合う——あるいはもっと良く言えば、一つの理念に奉仕する労働の中に最高の享受はあるのだから——その二人は、男と女の間で今日まだ支配している疎遠さの深い淵を満たすために、互いに努力する——それは全ての高貴なものの労苦に値する目標と課題である！

そのためには勿論女性たちだけではなく、男性たちも別の精神において教育されねばならない。彼らは自尊心と人格の繊細感覚 (Feingefühl der Persönlichkeit) を獲得せねばならない。その繊細感覚は彼らに個人的な愛なしの官能の喜びを、あるがままのもの、つまりそれに対しては自然の懲罰として吐き気が生じるところの、粗野で乱暴な行動として示す。精神化された感覚、「愛」において初めて官能の喜びは「地上の楽園の幸福、最大に心臓の動きを強め、畏敬の念に満ち、大切にされたワインの中のワイン」になる。官能の喜びを買う男は、自分が喜びを買うその者よりも、尊敬へのより高い要求を持ってはいないということ——彼がそれに関して自分を偽りたいのかも知れないとしても——彼らは理解することを学ばねばならない。

そしてそれ故、何故今日非常に多くの最良で最も有能な女性たちが結婚と母性性 (Mütterlichkeit) を諦めるのかということをも、未来の男性たちは理解する。男性と——彼が一般にどのようであろうと——結ばれることは、女性にとっては大抵むしろ「禁欲」であるかも知れない、と彼らは予感し始める。男性が生命力の最善のものを既に浪費してしまった、そういう男性を腕に抱くことの前に尻込みするのが、まさに女性における最善のもの——母性的本能——であることを、男性たちは理解する。もし女性が最も熱い抱擁の中で、その男がまさに全く同じように既に他の者たちを——しかもどんな他者であるこ

とか！——抱いていたと意識するとしたら、それはどれほどの身体的かつ心理的な苦痛と侮辱にちがいないか、ということの予感が彼らに開く。

性的関係において数百年來女性に課せられた厳格なしつけ (Zucht) は、全く手放すかあるいは手放さないかという繊細感覚を彼女に仕込んだ——ひょっとしたら他の全てが彼女にとって最も親密な人格の破壊を意味するかも知れないのに。——数千年の文化的差異によるように男から女性を分離している特徴——そして、自身類似の繊細感覚を所有している男性のみが、その特徴をそれでも全く享受し味わうことができる。その男性が彼の周知の「優位」に際して、この繊細感覚に到達できないかも知れない、と疑うことは冒涇であろう。何らかの禁欲的モラルにとってではなくて——より繊細な自己享受にとって——愛すべき人格のより高いしつけにとって——それは試みに値しないかどうかを？

女性の場合はあらゆる放埒は帰結を通して自己懲罰する——男性は罰されることなくそこから生まれた——と昨日の人々 (Leute von gestern) は言う。男性は本当にそれをするのか？ひとは人類の鞭を、性病を無視できるのか？

そしてそれが全ての者に該当はしないとしても——彼が内的にこうむる喪失は——最も親密なものを最愛の人間とのみ分かとうと欲する最も優しい遠慮の喪失、シンメトリックな人格でのみ満足しようとする最も優しい遠慮の喪失は——その全てがないのか？

彼は既に非常に損なわれているに違いないので、この喪失に決して気づかない！

「権力を得ることは高くつく、権力は愚鈍になる」とニーチェは言う。ああ、権力は単に愚鈍になるだけでなく、粗暴にもなる——そしてそれ故、特に男性たちもより良く教育されねばならない——どれほど逆説的にそれが響こうとも、それが「女性問題」の核である。——

政治的領域での権力は、経済的、社会的、法律的、道徳的關係において変化する。

女性は以前、長い間不参加で非活動的であり続け、余り良く稼がなかったのに、経済的に自立する今、それだけ全体の福祉に対する女性の関心も呼び起こされ留意されるべきである。男性は全ての大きな普遍的目標に対する女性の永遠の無理解にうんざりしており、個々の個人的なものもまた結局全体の福祉に依存しているということを感じない女性の、狭く矮小な見解に飽き飽きしている。男性が偉大で大胆なことを企てたいときに、今や常に鎖として彼の足にぶら下がっている女性は、彼の高貴な計画を支援し促進することを学ぶべきである。女性は自分の性の必然的要求を定式化し、代表し、支援を実現することを学ぶべきであり——女性の母性 (Mutterschaft) に自分の配慮と努力を以てより正当な評価を下すことを女性は支援するべきである！

家の狭い空間を越えて、狭く結び付けられた個人的幸福を越えて、女性は自分の眼差しを民族と人類の目標へと向けるよう学ぶべきである！

女性たちは——全ての高い文化から締め出されて！——自身の生涯にわたる伴侶共同体に選んだ人間が十分小さく低級ではあるはずがないので、従来自身の長所と自身への尊敬を悪く解釈したということ、未来の男性たちは洞察を始める。——男性がそれに耐えら

れる程度に、男性自身どれほどわずかしか高くあらねばならなかったのか！

しかし従来よりも「より高い人間たち」(höhere Menschen)を創造するためには、男性の協働が女性のそれと同様に必要であり、男性の教育の変更は女のそれと同様少なからず重要である。この意味において明日の男性たち(Männer von morgen)は努力する女性たちの側に立ち、この意味において彼らは男性の眠っている自尊心と繊細感覚を呼び起こすよう試みる。何故ならそうでないと最良の女性が男性に絶望し、彼を軽蔑するようになるという危険を、彼らは認識したのだから。偉大なものや高いものを得ようと努める能力を「人生」の知識がその男性にゆだねた、そういう男性は女性と共に次のように言う。即ち「今とかつて——それは私の最も耐えがたいものである——そして私が来るべきものの子見者でも告知者でも実現者でもないとしたら、恐らく私は生き方が分からないだろう！」

(かけがわ のりこ 生活機構研究科生活機学専攻教授)

